

縄文小説 森と海と月

〓五千年前の縄文時代の人々の愛と魂〓

森 裕行

目次

プロローグ

(1)	幼年時代 ヒツキリとタバッタの村	1 6
(2)	大巫女会議	3 3
(3)	少年時代の冒険	4 3
(4)	事件 愛とゆるし	7 5
(5)	海へ 和解と平和	1 2 2
(6)	フジの怒り 愛と真善美	1 5 2
(7)	愛と魂	1 8 3

プロローグ 何故、縄文小説を書くことになったか

1999年の1月3日。私は、生涯忘れられない体験をした。

人生の窮地のときは、もつと深刻な様子をしていてもおかしくないのに、その時はそんな意識すら浮かばず、迫りくる難問（かりにAとしよう）が他人ごとのドラマをテレビで見る風だった。

妻と一緒に四ツ谷の実家に訪れたのは正月の三日の午前九時。恒例の母と兄弟そろっての正月のお祝いで、いつものように華やいでいた。

ほろ酔い気分になった時だった。母が、「新しく建て替えた聖イグナチオ教会に、初詣に行ってみたら」と、ふと思いついたように言った。母は私がAについて悩んでいることを知っていて、時々気にかけてくれていた。新しい教会で私のために祈ってくれていたのだろう。

戦後すぐに作られた木造のお御堂には、母と一緒によく通ったものだった。新しく建て替えたとは、どんな風なのだろう。好奇心もあり、初詣がてらにちよつと覗いてみたくなった。

母は戦後すぐ四ツ谷の聖イグナチオ教会で受洗し、その影響で私も生後四ヶ月で幼児洗礼を授かった。そんなわけで、物心がついてから中学生ごろまで、母と一緒に日曜日に教会に出かけた。しかし、青年期となると、七十年安保の時代の雰囲気も手伝って、教会から急速に離れて行った。

信仰を深めたい欲求はむしろ大きかったが、今から考えると六歳の時に、友達の間で通事故死に遭遇した時から、罪悪感を抑圧する傾向がで、それが重荷になって離れて行ったところがある。とは言え、成長するにしたがい、窓から見える明けの明星の美しさに涙を流し、大学の卒業研究で数理モデルの幾何学的美しさに心をときめかしたこともあった。そして、社会人になって尊敬する上司に出会い、親鸞の話に心を動かされ、仕事や生き甲斐について思索したこともあった。

今から考えると、知らず知らずに信仰への旅路（真善美）をしつかり辿っていたのかもしれない。

成年期になり結婚し子供を二人授かり、外資系企業で一人前になってきたころ、思

いだけでなくAという問題が始まった、そうすると心が乱れるのか、関係のない領域でも悩むことが多くなる。夜一人の部屋でパソコンゲームに逃避することが増えた。

さらに、きびしい日々が続き、青年時代に読んでいた哲学書や宗教関係の本を引っ張り出して読み始める。重い問題には重い本がわりあうようだった。それで何らかの具体的な回答を得たことはないが、心に安らぎを覚えた。

ある日、早朝にNHKの教育テレビで宗教関係の番組を見ていた。番組では作家の遠藤周作の友人井上洋治神父が、キリスト教について語っていた。「日本人にとって、父と子と聖霊の「聖霊」が実は大事なのです」その言葉が何故か心に残った。幼いころからキリスト教について学んでいたが、聖霊については殆ど知らなかった。それは、後から考えると大きな変化の始まりだった。

人は打ちのめされると、自分の感情が見えにくくなってくる。不信心、疑惑・恥辱、罪悪感、劣等感、自己混乱感、孤独感、停滞感、そして絶望感が難問Aのために日々吹き荒れているはずなのに見えない。固い殻に閉じこもり、感情の嵐に向き合あわない毎日だった。その正月も、そんな台風の眼の中のような一日だったかもしれない。

妻と一緒に十一時過ぎに教会のご聖堂に入った時は、英語のミサが行われていた。カトリック教会のミサは、キリストの最後の晩餐を記念し、パンと葡萄酒を聖別して

聖体拝領（キリストの身体を頂く）を行う祭儀である。外国人が大勢いるご聖堂の最後方の出入り口のそば、私は未信者の妻と一緒に座った。既にミサは半ば過ぎており、まもなく聖体拝領が始まった。祭壇の前の神父の前に、信徒は列をなして並び、ホスチア（聖なるパン）を神父より頂く。

私はAの渦中で自の無力を感じ、教会に対しても負い目を感じていたので、はじめから聖体拝領はしないつもりであった。そして、妻と一緒に椅子に座り続けていた。そのとき、祭儀の補佐をしていたブラザーが、遠慮している信徒への気遣いからか、お御堂後方に神父を呼び寄せ、私たちが座っている出入口のそばで聖体拝領を始めた。私はそんなことは初めてで、大事なお客様が突然散らかっている我が家に来てきたように驚いた。神父が間近に来られ、近辺の何人かが立ち上がり並び御聖体を拝領し始めると、妻が「あなたは信者でしょう」と背中を押した。

少し前までは教会に行くことも、まして聖体拝領をするなど思ってもみなかったのに、母に勧められ、ご聖体が自ら近づき、妻にも背中を押された。軽い混乱感の中で、私は立ち上がり、神父様に近づいた。そしてご聖体をいただいた時、不思議なめまいを感じた。過去や未来のさまざまな不安が、「今ここ」の一点に急激に吸い込まれる体感。そして、準備もなく塵に過ぎない私が、「今ここ」に臨在している何かに救われる体感。その時、私は神とは何か、愛されるとは何かを瞬時に理解したように思え

た。そして、生まれて初めて幸福感の中にいた。

明るい感情の強い波がやや収まりかけたころ、急に身近になった神に「あなたはどなた」と尋ねた。私はキリストである、と答えてくれればという想いがあったのだろう。しかし、沈黙しか返ってこなかった。あたかも、それはあなたがこれから考えることだと促しているようだった。

聖イグナチオ教会で不思議な体験をしてから、私は教会に喜々として通うようになった。そして、カトリック関係の本をよく読んだ。不思議なことに学生時代に、良理解できなかったことが、良くわかった。不思議な体験を通し「神の愛を信じて見える世界」に入った為か、今まで見えにくいことが簡単に見えてきたのだろう。信仰には理屈ではない心理的な側面があるようだ。

それから、十六年経った。

私は勤めていた外資系企業の職を辞し、福祉の仕事や臨床心理学の教育事業に関わるなど、全く違う人生を歩んでいた。もちろん、1999年の出来事のあとも、人生の現実が変わるわけでないで、相変わらずAと取り組んでいた。ただ、Aは大きな壁といった苦悩の対象ではなくなり、それと共に解決の方向に向かって行った。

難局から脱出できたのは信仰もあるが、ご縁があつて出会った方々の助力も大きい。オックスフォード大学のLICOLSON（臨床心理学）の資格を持つU先生との出会いも、そのひとつだった。先生の「生き甲斐の心理学」は、自分の生き方の羅針盤として大いに役立った。カトリックの信仰とU先生の成育史を中心とした理論である「生き甲斐の心理学」は車の両輪となり、自分の心と魂をしっかりと支えてくれた。

U先生の「生き甲斐の心理学」の私塾にはもう十六年通っている。先生は欧米で臨床心理学を学べたが、その心理学は、比較文化論や比較宗教学の影響を受けた欧米の伝統的な臨床心理学であり、私にとっては馴染みやすかった。

心の世界で大きな働きをする宗教や哲学に関わるアイデンティティ（独自性）の問題を大切にしつつ、臨床心理学の百年以上の知恵を活かす学びであり、自分の道を探し辿るうえで、大変役にたっている。

ところで、U先生の「生き甲斐の心理学」には、実践的な人間観がある。医療、教育、福祉などの分野では単なる技術的知識だけでなく、深い人間観が必要になってくる。人間観は仕事の質に大きな影響を与えるものだから。

欧米では一般に人間を三つの要素に分けて考えるようだ。身体、こころ、魂だ。身体は医療の分野であり、こころは生育史を中心とした臨床心理学の分野、そして魂は宗教や哲学の分野と考えると分かりやすい。なお魂の解釈は多岐にわたるが、U先生

は非常にシンブルにカトリックの神学者ジーン・ドージヤの影響から、「愛そのものであり、死んで身体から離れる生命体」と定義されている。そう考え信じてみると、どんな酷い状態の人でも、「愛そのものの魂」がどこかに宿っているわけで、対応に希望と余裕が生まれてくる。それは私も身をもつて体感したことである。

さて、私の「生き甲斐の心理学」の学習も十五年を過ぎ、U先生に論文をそろそろ書いたらと勧められた。そして、「神の愛を信じて見える世界」を基本テーマとして、書き始めることにした。

「生き甲斐の心理学」の学びでは、日本人の心の古層を学ぶことを薦められた。日本神話や日本の古代史を勉強していったが、その延長線上の縄文時代に私は興味を持つようになった。

私が住んでいる地域には、たくさん縄文遺跡があり、散歩をしながら縄文文化に触れることができることもあったと思う。さらに、学問的にも遺伝子工学の発展等で縄文研究は、私の好奇心を刺激し続けた。もう一つは、私が七歳の時に、縄文文化に似た南東アラスカのシトカに約一年暮らしたことも、縄文時代に興味を持つ要因になっているかもしれない。兎に角、こころの古層探索と共に、楽しく勉強ができそうだった。

愛とは何か、人間とは何か。それをこの数年学んできた縄文世界に投影して小説を書いてみる。U先生に相談したところ、そういう論文も考えられるとので論文の付録として書き始めた。

縄文時代は今より明らかに、人の魂を意識していた文化だ。平均寿命も三十歳くらいと推定されており、生と死が生活の中で強烈に意識されていたようだ。

ところで、旧約聖書の出エジプト記(3と14)には、私はある(I am that I am)という神が登場する。不思議な言い回しだが、実はこれが私の体験につながってくる。近寄りがたい異次元の世界に存在する神秘、それにも関わらず親しく自分を愛してくれる全能の実感を持った存在。サムシング・グレイトと言ったら良いのか。

旧約の時代も、名前のある神はたくさん存在したと思う。初めて人類が文字を持ったのは、さらに時代を遡るメソポタミア文明だが、名前のある神は何千と存在した。しかし、何故「私はある」という、不思議な神が出てきたのだろうか。おそらく、生命体の創造とか、全能性といった人間の限界を超えた神という意味合いが含まれているのだろう。

私たち日本人の祖先はどういう神を信じたのだろうか。この小説の舞台の縄文中期

は、四大文明では唯一メソポタミア文明が花開いていたが、このメソポタミア文明では文字が使われ宗教や神話の話もたくさん残っている。

しかし、縄文文化は残念ながらメソポタミア文明のように文字をもっていなかったのでよくわからない。これは、何か劣っているように感じられるが、本当はどうだろうか。ただ、文字による記録はなかったことは事実で残念至極である。とはいえ、土器に描かれている図像などから、七世紀に日本書紀等に記された日本神話の原型が既に存在していたという研究も今では発表され、文字以外からのアプローチも可能であるようだ。

日本列島は、大陸の文化と異なり人間同士の収奪・戦争は殆どなかったようだが、カルデラ火山の大爆発や地震・津波など未曾有の自然災害があり、祖先は、その悲惨さを生き抜いてきている。そうした厳しい現実の中で、「私はある」という神秘も現れたのではないだろうか。ただ、それを敢えて文字で表現することはなかったに違いない。むしろ、文字を持たなかった一万年以上続く文化そのものが、無名性を持つ「私はある」という神秘を信じていた文化の可能性はないのだろうか。

時代は下がるが、西行法師が伊勢神宮で書いたという歌がある。
「何事のおはしますかはしらねども かたじけなさに涙こぼるる」

この歌を味わうと、神仏の愛の実感に共感してしまうのだが、こうした心情は縄文時代から脈々と流れていたのではないだろうか。

さて、この小説では主人公マポが登場する。実はマポのイメージは、新宿区加賀町二丁目遺跡で発見された五千年前の十二号人骨から生まれた。2015年の春に新宿歴史博物館で「新宿に縄文人現る」という特別展が開催され、私は胸を躍らせて展示を見学した。十二号人骨は部族の長だったようで、マイルカの腰飾りなどの副葬品もあり、頭部には頭蓋骨が陥没するほどの傷痕と、その後の治癒のあとが残っていた。DNA検査等から彼の遠い祖先が大陸の北方であることや、当時の食べ物の傾向、死亡した年代まで判明されていた。

私は、十二号人骨が発見された市ヶ谷の近くで育ったこともあり、また、今住んでいる多摩も大規模な千年村の縄文遺跡があることから、時間さえあれば身近な縄文遺跡周辺を訪問しつつ、マポを夢想してきた。マポの誕生から死まで、そこにどのようなことが繰り広げられてきたのか。また、この二、三年は、日本各地の有名な遺跡も訪れた。近郊の貝塚を訪ね、富士山の遺跡、信州の鋭利な切れ味を持つ黒曜石採掘址遺跡、北陸の翡翠（ヒスイ）やウツドサークル、秋田の大湯遺跡、青森の三内丸山遺跡、是川遺跡、そして地元の多摩の遺跡。こうした旅で小説のイメージを膨らませた。

マボは1991年にヨーロッパのアルプスで偶然に見つけたアイスマンとほぼ同じ時代の人であり、イメージを膨らませていくと小説でリアルな輪郭が書けそうだった。ただ、考古学をはじめ民俗学、神学、宗教学、臨床心理学、遺伝子工学、古代天文学、さまざまな知識が必要になってくる。いずれも初学者の域を出ない私であり、至らぬ点は沢山あるが書きたい衝動を止められず、心理学の論文が一応完成した後も、小説の部分には手を加えてきた。そしてこれも、私にとっても初めての小説を公に上梓することになった。

プロローグの最後に、縄文時代の暦について一言付け加えたい。岐阜県の金山巨石群の研究から縄文時代はかなり進んだグレゴリオ暦並みの太陽暦があったと言われている。どのような太陽暦かは今後さらに調べていきたいが、個人的には四千年前にあったバビロニア暦のような太陰太陽暦が日本の縄文中期にあっても不思議ではないと思うている。というのは、縄文時代の定住型の文化は実に繊細な多様性のある食文化などに支えられているようで、その背後に緻密な暦があってもおかしくないと思うからである。とはいえどのような表記だったかは不明なので、とりあえず、年月は今の西洋太陽暦、日には太陰暦（1日が新月、8日が上弦の月、15日が満月、22日が下弦の月・・）といったイメージの暦とした。小説の日時を追うときに季節感と月をイメージし楽しんでいただければと思う。

もう一つお願いだが、この小説は歴史小説と同じように人間関係や年表を重んじている。巻末の年表、登場人物点描などを参照して読んでいただければと思う。



(1) 幼年時代 ヒッキリとタバッタの村

BC3067年12月3日 (マポ四歳)

屋根の煙抜けから薄明かりが届きはじめる早朝。囲炉裏の、ゆらゆらする灯の光の中で、熊の皮で作った外套をオリザは身にと、昨晩できたばかりの鹿の靴を履く。妻のイトは、囲炉裏で火種用に干していたキノコと携帯食のおやきを手際よくオリザの腰籠に入れる。オリザは立ち上がり、赤い漆塗の弓と矢筒を持ち、腰籠を身に着けると、奥の祭壇に一礼し戸を開けた。

外の弱い光とともに冷たい風が吹きこむ。暖かい床で寝ていた幼い二人の息子が、同時に寝がえりをうった。イトはまじないを唱え、火打石を打つ。そして、自分の頭の赤い漆塗りの櫛を抜いてオリザに渡す。櫛は悪霊退治にきく大事なお守り。オリザは赤い櫛を大事そうに懷に入れ、妻の肩を軽くたたいた。イトは安全祈願のために、これからオリザが帰宅するまで特別な生活をしなければならなかった。

外に出ると、縄文犬ポツがキツネ顔で黒い瞳を主人に向け、しきりにしつぽを振っていた。ここは多摩川の上流、大栗川周辺は寒く、吐く息は白い。昨晩降った雪は一寸 (3.5cm) くらいだが、村は雪化粧。村の中央の広場は足跡一つなく真っ白だ。

以前は多摩には雪がめったに降らなかったが、この数年、毎年のように降ってくる。縄文前期に温暖化の頂が来てから、果てしない長雨が続き、徐々にこの列島は寒冷化に向っていた。

長男のウイが生まれる二年前、はやり病が冬に流行った年だった。イトとオリザが結婚をした前年にあたる。春になつてもコブシの白い花もつかず、エビネ（らん科）の花も元氣なく、梅雨を告げる紫陽花も悲しげであつた。夏もおろおろするだけで、栗やどんぐりやクルミもうまく育たない。それでもキノコや川魚の恵みで生き延びてきた。その冬に、病床に伏していたオリザの父タケをイトが最後に見た日も雪だった。

オリザはポツを連れて、村の高床の南西倉庫の裏を通りぬけようすると、隣に住むイトの妹のハルが朝餉の支度に炊事場に向かおうとしていたが、オリザを見ると声をかけた。「長どの、朝から精がでますね」、「いやいや、冬はイノシシの美味しい季節、皆で精を出すためにも、イノシシを捕らねば。今日は黒谷に仕掛けた落とし穴を見、それから、ムササビの森の奥にも入るかもしれぬ。森に入れば二日はかかる」

ハルはにこりと微笑み深々とお辞儀をする。オリザは、息を白くしつつ、村の西側の出入り口から回り込んで北側のヒッキリの丘への急な坂道を昇る。ヒッキリの丘の頂を通り抜け、一日目に黒谷に作った落とし穴を見に行く。村の北側の雪で滑りやす

い急坂を上りきると北風が凍えるようだ。オリザは熊皮の外套の頭覆いのひもを結びなおす。

丘の頂から振り返って眺めると、太陽がゆらゆらと昇り始めてきた。太陽は茜色から朱鷺色（ときいろ）に変わった光を眩しいばかりに雪原に放ち、黄泉の国からどんな昇る。きらきらとした清々しい光が粉雪のように降り注いでくるようだ。丘の上からは、右手に縄文海進で大河となった大栗川がゆったりと流れ、黒々としていた川は朝の光で急に息づき輝きだす。

オリザはヒツキリの丘の上から川の左手の太陽を拝む。「新しい朝の光は、人を清くする」。そんな父タケの口癖が聞こえるようだ。タケは、高熱で寝込み持ち直してきたのだが、愛妻のアキが眼を離れた隙に忽然と村から去って、行方知らずになってしまった。生きているのか死んでいるのか。アキはタケを二年間、探し求めたが見つけることができず、最後にはムササビの森で落胆の余り首をくくった。

ポツは雪道に黒い点々とした足跡を残して、丘を全速力で下り、道の先でしきりに吠えている。ヒツキリの丘から北西の落とし穴の方向、黒谷からだ。オリザは矢筒から矢を二本取り出し、腰を低くして弓に矢をつがえ近づくと、激しく吠えているのは

落とし穴の中のようなだ。獲物がかかっている。穴の周りには、数頭のイノシシの気配を感じたが、オリザが近づく素早く森の方向に逃げていった。つがいのイノシシと子供のウリ坊か……。村の総出の狩りであれば、ウリ坊を生け捕ることができ、大切に育てあげ、秋の祭で送ることができたのに残念だ。

落とし穴には雄のイノシシが逆茂木にかかってもがき苦しんでいた。オリザはゆっくりと息を吐きながら、熊皮の外套の上から、胸の妻の赤櫛のお守りを抑え、そして弓をいっばいに引いた。矢が放たれ、大鷲の羽の矢につけた星糞峠の黒曜の矢鏃が吸い込まれるようにイノシシの心の臓に食い込み、血がどっと吹き出しイノシシは短く吠えて静かになった。

村の仲間の笑顔を想い、嬉しさがこみあげてくる。冬のイノシシは脂がついていてうまい。オリザは神に感謝しつつ、イノシシの魂に祈りをささげた。そして、懐のイトの赤櫛を上からもう一度さすった。

時は縄文中期、今から五千年前。

温暖化で縄文海進が進み内陸部まで海水面が上がっていた縄文前期。その後徐々に寒冷化がすすむが縄文中期もまだ海水面は高く、水上交通が盛んで、富士山の周りを取り巻くように関東甲信の文化は花開いていた。富士山と諏訪湖を地図で眼と見立てると、眉状に文化が開けていたので、ある考古学者は富士眉月湖文化圏と呼んだ。この物語はこの文化圏を基にしたマユ部族連合体の話である。

同じ時期、世界に眼を広げると四大文明の最古のメソポタミア文明が開けていたが、森を伐採し強烈な都市国家を形成していた時期になる。こうした文明は今まで注目されてきたが、現代文明が行き詰まるなかで、その対極の森と海を大切にする共生型縄文文化が、注目を集め初めている。

さて、縄文中期に生きていた主人公マポ。今の京王線堀之内駅（東京都八王子市）の芝原地区の東、愛宕神社に隣接している多摩ニュータウンNo. 446遺跡であるヒツキリ村に生を受ける。今の東京西部近郊である。当時は縄文海進で大河だった大栗川（多摩川上流）のほとりに位置する。早朝にイノシシをしとめた父オリザ（三十三歳）はタマ族の長（おさ）であり、由緒ある家系の巫女イト（二十八歳）を正妻にしていた。二人は長男ウイ（七歳）と次男マポ（四歳）を授かっている。長女ナツを